

論文

海外醜業婦問題と日本社会の病理性

—天草女性に関する基礎的文献を通して—

内藤 辰美
佐久間 美穂

Some Considerations about the Japanese South Sea Trade and Prostitute (JOSHIGUN) on the Age of Modern Japan

Tatsumi Naito
Miho Sakuma

本論は天草を中心とする海外醜業婦、「からゆきさん」の研究である。海外醜業婦の問題は近代日本の社会と国家が生んだ社会問題、構造的な社会病理現象である。この問題に関しては、これまで、研究の蓄積がある。とりわけ森克己、森崎和江、山崎朋子の研究は、天草に焦点を当てた優れた実証研究である。われわれは、それら先駆者の研究から、天草における海外醜業婦の実態を確認し、合わせて、近代日本に生じた海外醜業婦の問題を、社会学的、社会福祉学的立場から検討するものである。

キーワード：天草・社会階層・過剰人口と貧困・海外醜業婦・娘子軍・周縁・国家と民衆・女街

問題の所在

日本社会における海外醜業婦の問題は、単に個人や家族の問題でなく、社会構造の問題である。それは、明らかに、日本社会に潜在する構造的病理のひとつである。構造的病理とはなにか。それは、社会構造に根差した矛盾が表出させるところの社会問題である。

海外醜業婦は決して偶然に生み出されたものではなく、貧困と自由の抑圧を通じて、歴史的に創られてきたものである。海外醜業婦問題の根底には、貧困と自由の抑圧を再生産する社会構造（制度的複合）と、その社会構造を貫いている支配—被支配の関係があることを知らなければならない。その歴史は古い。しかし、いずれの時代であれ、そこに共通するのは、人間の尊厳に対する認

識の欠如であり、国家や権力による民衆の抑圧である。

小論のねらいを簡単に示しておくことにしよう。小論のねらいは2つある。1つは、これまでに、この問題に関する重要な研究・調査文献として評価の高い、森克己『人身売買』・森崎和江『からゆきさん』・山崎朋子『サンダカン八番館』及びその他若干の文献の記述を借りて、海外醜業婦のおかれた状況と、天草を中心とした海外醜業婦の歴史的位置を確認すること。2つは、からゆきさんを中心とした人身売買の背景にある日本社会の病理性について少しく検討を加えることである。^{註1}

1. 森克己『人身売買』

日本歴史新書の一冊として出版された本書は、

天草における海外出稼ぎ女に関するもっとも重要な文献である。この本のはしがきには、非常に大事な記述がある。「人が人を売買するということは、人権尊重の上からも、社会問題の立場からも許すべからざる行為であることは、いまさらこと新しくのべられるまでもない。にもかかわらず、人身売買はいつの時代にもあったし、いまもなおその跡を絶たないのである。そのうちでもいわゆる<天草女>の場合は、海外に売り飛ばされた婦女子の問題であるだけに、特異な人身売買であるとともに、国際的にも、歴史に残した恥ずべき日本の汚点であった。しかしたとえ汚点であっても、歴然たる歴史的事実である限り、<臭いものには蓋をする>主義であってはならない。事實は事実として認め、さらに一步踏み入って、どうしてこうしたことが行われたかという社会悪の根源を抉り出し、反省と対策に資することこそ歴史学者としての当然の義務である」(森克己、はしがき)。われわれは、森の言う、歴史学者としての当然の義務を、社会科学者の当然の義務とも考えることにしたいと思う。

本書の概略である。森は、はじめに、我が国における人身売買の歴史を概観する。わが国の場合、人身売買に転機が到来するのは明治に入ってからのこと、明治5年10月2日の太政官布達第290号の通達によってなされた人道主義的宣言以降のことである。しかし、その通達も、わずか1年にして消え去ってしまい、翌明治6(1863)年再び遊郭施設設置が許可されて、人身売買は復活するのである。わが国において、売春禁止に関する法律が施行されたのは昭和33(1958)年のことである(森克己、10~13)。森は、こうして、わが国における人身売買の歴史を紹介し、本書を執筆した動機について、次のように述べている。「以上は、わが国における人身売買のおおざっぱな歴史であるが、以上の場合と少し性格を異にした人

身売買のケースがある。それは次章から述べようとする海外出稼ぎ女、いわゆる天草女である、これは今までに述べて来た国内の人身売買とは違い、海外での日本人婦女子の人身売買である。日本政府の監督の眼が届かぬところで行われた人身売買であることと、彼女たちの対象は異邦人であったことなどという国内の場合とは異なった条件のもとに行われたものであり、海外の出来事であるため、これまでほとんどその実体がかままれていないので、私は次にこの問題にメスを加え、徹底的にその内部の実体を明るみに出し、人身売買問題に対する人々の認識と反省を促したいと思う」(森克己、13頁)。

森は、以上のような認識を示した後、まず、天草の人口問題を考察する。天草は四面海に囲まれ、上島・下島・大矢野島の三大島のほかに百余の小島が散在し、面積573方里、熊本県全体の1割2分を占め、東西12里、南北1里19丁、下島の周囲76里、上島35里、大矢野島7里で、総人口は昭和25年(1950)に240,750人、戸数47,215戸を数え、全国有数の大郡である。しかるに、島内はいたるところ山また山の連続であり、しかもそれらにはこれぞという高峰はないが、いずれも急傾斜であるために大きな川もなく、したがって平地が極めて少ないため、面積の広大なわりには耕地がとぼしい。こうした地理的条件は、人口過剰を来し、近世以来さまざまな社会的・経済的な問題をひき起こしてきたのである。島民の他国への出稼ぎもまたそうした一つの現象にほかならない(森克己、14~15)。

天草の窮乏と過剰人口は必然的に出稼ぎに頼るという構造を生みだした。ことに西海岸の天草灘に面した地方の都呂・福連木・下津深江・小田床・高浜・大江・今富・崎津等の村々は山地多く且つまたそれが海岸に迫っているために、耕作地が狭小であり、且つまた大江・崎津を除いては良港も

少ない寒村であった。・・・したがって特にこの地方からは、はやくから他国出稼ぎ人が排出したのは当然である（森克己、23）。万治元年（1658）8月以降、代々同村の庄屋を勤めてきた上田家の6代目の傳右衛門が、宝暦12年（1762）、同村内の皿山に陶山を開き、肥前より陶工山路幸右衛門を招き、陶石を利用して陶器製造を開始したのも、田畑を持たない水飲百姓や不具者たちにまでも授産しようという考えもあったからであり、その結果約300人ほどの村民に生活の道を開いてやることのできた（「宝暦12年12月上田伝五右衛門陶山1件願書」）。・・・こうした殖産工業を興したにもかかわらず、同村窮民全部を潤わすわけにはゆかず、窮迫した者たちは他郷へ出稼ぎして活路を見出さなければならなかったのである（森克己、25～26）。^{註2} 土地が狭小で人口が年をおって激増していく天草にとっては、出稼ぎということが死活問題であるので、一向に出稼ぎを抑制することはできなかつた。・・・それどころか、飢餓の場合などには、かつて為政者の方から出稼ぎを奨励しなければならぬような矛盾した事態さえ度々起こってきたのである（森克己、26～27）。天草からの出稼ぎ先の圧倒的多くは長崎であった。

注目すべきは、すでに慶応のころ（1865～7）から、長崎に奉公人中の天草の女たちの中には、海外へ渡航するものが現れてきたことである。それらの女たちはオランダ船やイギリス船・ロシア船などによって誘拐され、海外へ連れ去られたものであった（「天草富岡町、福島留一氏談」明治45～大正8年、シンガポールで女郎屋等経営）（森克己、51～52）。やがて、女たちは日本人の男子さえ入り込んでいないような奥地の辺鄙な土地にまでもはいりこんでいくようになる（森克己、66）。

こうしてすでに明治20年（1887）には、意外にも多数のいわゆる天草女たちが、シベリア・満州・北支・中支・南支方面へ渡航していたのであ

る（森克己、66）。南洋への進出はどうか。東南アジアに関する日本の関心は、ようやく明治20年（1887）前後より高まってきたのであるが、学者や政治家をはじめ、まだ一般日本人が東南アジアに全然関心を持たなかつたころ、すでに天草女たちは日本人の先駆者としてこの方面にぼつぼつ渡航していたのである（森克己、74～75）。

それでは、一体どのような動機から、またどういう方法手段によって、か弱い彼女たちが男子に先じて北の涯や南の涯まで渡っていったのであろうか。・・・当時海外へ渡航した彼女たちの十中八、九は誘拐者の手によって誘拐され、しかも正規の出航手続きを経ないで嫌や応なしに密航させられたものたちであった（森克己、89～90）。誘拐者が田舎をまわって娘たちを誘拐する場合には、外国へ女中奉公させてやると称して大々的に景気よく募集しておいて誘拐することもよくやった。また場合によっては親たちに1,000円か、1,500円も現金を握らせて喜ばせ、信用させた上で誘拐するという手も使った（森克己、93～94）。しかればいわゆる天草女たちとはどういう女性たちであったか。内地の遊郭に身を沈める女たちの場合、大正7年（1918）の調査によって見ると、有教育者6割8分、無教育者2割6分、有教育者のうち高等女学校の課程に入ったものが1割3分となっている。その家庭の家長の職業も多種多様で、天草女の場合のように、農業が絶対多数を占めてはいない。また遊郭に身を沈める女たちの大部分が、身を沈める以前にすでに節操を捨てたものたちであるのに対し（上村行彰「売られていく女」）、天草女たちは、誘拐されるまでは無学、世間知らずの田舎の生娘であった（森克己、97～99）。

天草女の海外渡航には背後に誘拐組織があった。誘拐者たちは上海・香港・シンガポール等に根拠をもち、日本内地にやって来ては甘言を持って婦女誘拐をこととしていたのであるが、その誘

拐の場合はほとんど正規の手続きは踏まず、密航によって婦女子を海外に連れ去っていたのであるから、どうしても船の船員と結託しなくては事が運べないのである。・・・誘拐された婦女子たちは船底深く隠され、警官が引き揚げてしまったころあいを見はからって船底から引き出され、以前は馬車、のちになると自動車で日本人旅館に運ばれる。日本人旅館はまた宿泊人帳簿を領事館に提出することになってはいたが、いずれも形式的なものだから、帳簿の上ではほとんど発見することができない（森克己、101～102）。上海・香港・シンガポール等の外地から内地に渡って婦女子を誘拐してくるには、船賃やら、密航のために船員を抱き込むやらで、誘拐者も相当の資本を必要とすることはいうまでもない。ことに、密航船の船員に支払う礼金は大きく、女を売った金の半分はそれにあてられたのである（森克己、111～112）。

村岡伊平次は誘拐者のボスとして知られている。村岡伊平次は慶応3年（1857）10月10日、長崎県南高来郡島原場内で生まれた。父は島原藩の下級武士であったが、明治3年（1870）同郡南串山村に住み、さかな屋の屋号で荷受け問屋を営んだ。その後北海道屯田兵の部長になり、また帰村して長崎県弁護士になったりしたが、明治10年（1877）10歳の伊平次を頭に5人の子供を残して病死した。その土地所宅地も人手に渡ってしまったので、やむなく学校も4年で退学し、10歳のときから商売にたずさわって生魚を売ったり、三文店を出したりして母を助けて生計を立てた。明治17年（1884）村会がつくられると17歳で村会議員に当選した。その年結婚して長女が生まれたが、家運再興のため同年ぐれに長崎市大浦相生町51号へ席を移した（森克己、119）。村岡伊平次については、後にもふれることにしよう。

森の観察は天草女の最盛期に移される。日露戦争前後～第1次世界大戦前までの10年間ほどが天

草女の最盛期であった。・・・明治41～42年（1908～9）頃には、シンガポール市内には約20,000人の邦人と500軒の女郎部屋があった。・・・彼女たちの中には、はじめ誘拐された女として、雇主の下で働き、雇主に率いられて渡り歩いておったものが、長年の間に資本を蓄え、雇主の地位にのぼって、今度は天草女たちを抱きかかえる楼主となったものもある（森克己、150～166）。ヨーロッパの海外発展には海賊やキリスト教の宣教師がその先駆的役割をつとめたが、第1次世界大戦以前においては、いわゆる天草女が日本人のアジアへの発展の先駆的役割をつとめたのである（森克己、167）。

戦後、森は、天草女の実態調査を実施する。第10章はその成果であり、森はここからいくつかの結論を引き出している。天草の人口は、江戸時代中期の幕府直轄領時代より飛躍的に増加し、人口過剰という深刻な問題に悩んできたのであるが、明治に入ってから以後も絶えず増加の線をたどり、大正6年（1917）には戸数35,441、人口202,159人だったものが、昭和17年（1942）には戸数35,441、本籍人口256,264人、現在人口180,810人となり、終戦直後には、216,172人であったが、昭和25年（1950）10月1日の国勢調査の際には、240,750人となっている（森克己、182）。森が天草女の実態調査を通じて得た結論は、農業もダメ、水産業もダメ、工業もダメとすれば、結局近世以降続けてきた島外出稼ぎ以外はこの窮境を脱する道はない。特に内地にくらべて労働賃金の大きな外国への出稼ぎ者が多かったのは当然であるというものであった（森克己、188）。昭和16年（1941）天草在籍者の在外人口は次のようになる。すなわち30,227人が海外へ出かけていったのであり、当時の天草の人口は約18万であったから、その6分の1にあたるものが外地にあったことになる。しかし海外のどこの土地でも天草男子より女子が

断然多いということは、いわゆる天草女と一連のつながりをもつものである（森克己、189）。

天草は耕作地が少なく、したがって零細農の多い村ほど海外発展が盛んであり、且つまた天草女も、こうした村から多く送り出されている。そして結局移民によって人口過剰が緩和され、出稼ぎ女たちの送金によって家族の生活が支えられ、その村の経済が潤されるということになるのである。一方すでに述べたように、海外で女郎部屋を経営する雇主側も、女たちを働かせる手段として、彼女たちの働きはつまるところ国家への貢献、親たちへの孝行ともなることを説いて郷里への送金を奨励し、また日本人のごろつきから遠ざけて、女たちが彼らに搾られることを防いだので、女たちは貞操を代償として得た金をせせと郷里の親兄弟の下へ送金していたのである（森克己、211）。それならば 以上のように外地にあって身を粉にして送金を続けた出稼ぎ女たちは天草全体で一体どれほどの数に上ったであろうか。このことは誰しも関心をもたれる点であるが、後の章に述べるように、天草女たちの南方発展は大体第一次大戦以前のことであって、第一次大戦を契機として下火となっていったので、今日ではもはや当時のことを記憶する人びとも少なくなり、今は資料らしい資料は残されていない。況してそれは密航という、正規の手続きを踏まない非合法的な出航であったのであるから、文書・記録にその痕跡を残すべき筈もない。そこまで今日その資料を求めようとするれば、天草の町々村々に生き残っている海外より帰郷した女たちについて調査するより方法はない。・・・私は3回にわたって天草の目ぼしい村々を生き残りの天草女たちを探し求めてまわった。その結果、そうした老婆たちはやはりすでに述べたように、耕地1戸平均5反以下で特に零細農の多い村々に余生を送っていることと、彼女たちのうちで最も幸福な生活をしているもの

は、白人の主人を伴って天草に戻って、洋館を建て文化的な生活を送っているものたちであることを知ったのである（森克己、212～213）。

天草女は、窮乏生活環境の中で育ったため、比較的低い生活に堪え、土間に寝ても平気である。大病人が出ると床上げという。病気がよほど重くならないと床を強いて寝かせない。こうした困苦に堪える体質は気候風土を異にする海外生活にも順応し得たし、天草人が早くから続々海外へ出稼ぎに出ていたのも、海外に出ることをそんなに苦にしなかったこと、ことにその性質が素朴純情であるという点が、誘拐者たちの誘拐対象としてはもってこいであるし、女郎部屋経営者たちが搾取するにも都合がよかったのである（森克己、224～225）。

大正3年（1914）第1次世界大戦が勃発し、わが国は連合国側に立って参戦し、ヨーロッパ諸国がヨーロッパの戦争に全力を傾けつくしてアジアの自市場を顧みる暇がなくなったのに乗じて、東南アジアの貿易に進出し、従来の三井・三菱のほかに大阪商船・山下汽船の支店、その他の諸商社支店がシンガポールに設けられ、従来の前科者・内地食詰め者に代わって一般邦人が次第に南方に進出し、その人口も増加し、ゴム園や椰子園を経営する等、経済的にも優勢となってくると、やがて天草女たちを＜大日本帝国＞の国辱的な存在として厄介視するようになった。また日本政府も国際連盟の婦人及児童売買禁止条約に調印するなど、禁止の方向に一步踏み切った関係上、賛成しないが黙認するという曖昧な態度から、営業させぬという方針に転じてきた（「天草下田温泉、西島正信氏談」）。そして領事館が女郎部屋楼主を呼びつけて説諭して廃業させる、または女の身代金を払って廃めさせるようになった（「天草志岐村、村上五八氏談」）。そして女郎部屋楼主組合の共済会に対して一般邦人の組織した日本人会は、女たちの自由廃用を奨励し、さらに大正末期、日本人

会各地代表と領事館とが共同してシンガポールで大会を開催し、女郎部屋楼主らに対し、2・3年の猶予付きで自発的廃業をするようにとの勧告を決議した（森克己、231～232）。この同胞の重圧的勧告のために、楼主たちも従来のように営業を続けるわけにはゆかず、次第に廃業して引き揚げるもの多く、昭和2年（1927）のころはほとんどその姿が見られなくなってしまった。・・・そして第1次大戦後は、天草女に代わって中国の女が多く売春婦となった。天草女たちの南方発展の基地ともいべきシンガポールがこのありさあであったので、南方各地での天草女も次第に凋落していったのである（森克己、232～233）。

以上、森による蒐集資料や調査結果の吟味はあえて避け、『人身売買』の概要を記述した。森は丹念な資料の蒐集に加え、戦後、天草実態調査を実施した。確かに、森の『人身売買』には、信憑性に欠ける村岡伊平次の『自伝』が活用されていて、矢野暢（矢野暢、30～31）や山崎朋子（山崎朋子、14）らが森の研究の一部に疑問を指摘する。しかし、如何なる資料も、ましてや伝記の類ともなれば限界のあることは仕方がないことであって、問題は、それによって著作全体が価値を低くするかどうかということであろう。森の研究にはそうした限界を補って余りあるものがある。

2. 森崎和江『からゆきさん』・山崎朋子『サンダカン八番館』

森崎和江・中島岳志『日本断層論—社会の矛盾を生きるために—』（森崎和江・中島岳志、2011）に、森崎と「からゆきさん」との出会いについての記述がある。^{註3}

中島 「ところで、『からゆきさん』は、1971年ぐらいから取材をはじめられますが、これを著書としてお出しになるのが76年ですね。森崎さんの代表作の一つです。からゆきさんと出会ったのはどういうきっかけ

だったんですか。

森崎 「それはもう、ものすごく早くからなんです。何の集まりだったのか、療養所から帰ってきたとき、『母音』以外にもいくつか詩人の集まりがあったのね。そこに綾さんという人がいて、彼女と個人的つながりができました。綾さんは、からゆきさんとして朝鮮半島と中国の間の鴨緑江かな、その近くに売られた女性が産み落とした女の子だったわけ。「母親は転売されて中国の方に行ったんですけれども、綾さんは、後から娼楼に来たおキミさんという人が育ててくれた。おキミさんは彼女をなんとか女学校に入れてあげようと育ててくれて、敗戦でともに引揚げてくるんです。綾さんは私に、「二人とも朝鮮で生まれたけれど、あなたは橋の上の人、私は橋の下」と言って、母親となってくれたおキミさんの個人史を話してくれた。おキミさんは李慶春という斡旋業者に買われて4人の少女たちと海をわたったの。「おかげで、だんだんと私は、彼女を通して、女はそんなかたちで商品化されていたのかと知りました。そして西日本新聞社に行って、明治からの新聞をじっくり読ませてもらったんです。その後、その売られた女たちでこちらに帰った女性を訪ね歩いたんです。5年ぐらいかかりましたね、『からゆきさん』を出すまで」（森崎和江・中島岳志、192～193）。

森崎和江の『からゆきさん』は、山崎朋子の『サンダカン八番館』や、大場昇『からゆきさんおキクの生涯』などとともに、からゆきさんを知る上で不可欠の調査・資料（文献）である。とりわけ、前の二著は、天草の女性たちを中心にした研究であり、天草に焦点を当てようとするわれわれの研究からは必須といってよいものである。それは、ともに、森の『人身売買』と並ぶ力作である。以下、二人の調査・研究に目を通してみることにしよう。

森崎はこの研究を、おキミさんという女性（育

ての母)と綾さん(娘)の話から始めている。娘は母が狂うという。「あたしが狂ったとでも思ったでしょう。でも母はね、あたしと二人になると、もっともっと狂うのよ。母はからゆきだったのよ。売られた女よ」(森崎和江、7)。おキミは天草の牛深に生まれて養女に出された。・・・養父は浅草で居合抜きをして投銭を得ていた人であった。おキミが養女になったころは「因業小屋」という呼び名の小さな興業をしていた。心中とか辻斬りとか、蛇娘などを見世物とするのである」(森崎和江、8)。その当時は、「養子とか養女とかいう名目で芸人として、あるいは娼妓として売られる者はいくらかもいた。それは明治になる前からの風習であった」(森崎和江、9)。おキミはこの小屋から、また養女に出された。明治末年、16歳のときである。おキミを養女とした人は李慶春といた。因業小屋にいた少女とふたり、おキミは李慶春につれられて小屋を出た。行く先は朝鮮ということであった。おキミは「からゆき」になったのである(森崎和江、9)。海外への出稼ぎといっても、明治のころは海の外も賃労働は少なく、行商をするか、雑用に使われるか、・・・ひとり娼楼ばかりがさかえた。そのため海を渡る女が後をたたず、やがて「からゆき」とはこれらの海外の娼楼に奉公に出る女たちを意味するようになった(森崎和江、18)。明治のころの福岡の新聞に、「密行婦」ということばがたびたび出ていた。はじめてこのことばにゆきあたったとき、わたしは衝撃をうけた。それはからゆきさんのことだったからである」(森崎和江、20)。「奉公先を周旋する口

入屋は東京では桂庵といった。芸妓、娼妓、酌婦、仲居、宿屋女、下男、下女と呼ばれている職種へ人びとを世話して、その手数料で生活する者たちであった。・・・女衞は芸娼専門の口入屋であった」(森崎和江、27)。海外の娼楼にいるからゆきさんがもっとも多かった時期は日露戦争から大正のはじめまでの10年間だが、そのころは香港やシンガポールなどの密行業者の顔役に、日本人もおさまっていた。かれらは港での顔役であり、海外娼街での親玉であり、また海外日本人会での重鎮、且つ日本国内の婦女誘拐密行業者たちのボスであった。そのひとりに多田亀とよばれる男がいた」(森崎和江、31)。

わたしは、明治の新聞にふれて、そのころからからゆきさんのことは多少感じとれるようになっていた。けれどもわたしが読んだのは、どちらも福岡県の新聞なのである」(森崎和江、41)。「しかし、その記事を読みつつ気づいたのは、被害者の出身地がかたよっていることであった」(森崎和江、41)。「こんなわけで福岡日日新聞の明治35(1902)年から44年(1911)年までの10年間の「密行婦」を集計してみたのである。・・・もっとも多い長崎県なかでも長崎市と、それから島原半島とがきわだっていた。ついで熊本県だが、これはほとんど全員が天草である」(森崎和江、42)(表1)。

長崎市島原地方と天草が群を抜いて多いということにあらためて記憶が必要である(森崎和江、44)。「おキミは李慶春の養女として咸鏡北道出身の李の戸籍に入っていたが、綾さんを養女に迎え

表1 密航少女たちの出航地(森崎和江、43)

県別	長崎	熊本	福岡	広島	佐賀	山口	大分	愛媛	鹿児島	岡山	兵庫	大阪	香川	鳥根	高知	新潟
	119	96	66	40	32	26	25	15	13	8	7	5	5	4	3	2
鳥取	石川	愛知	不詳	合計	(福男日日新聞<明治35~44年>の「密航婦」記事より集計)											
1	1	1	161	630												

たとき、日本内地の戸籍にかえった。・・・綾さんはおキミが世話をしていた娼楼にいた娼妓の子である。おキミを身うけした男は、おキミのあとつぎつぎに女たちを引きぬいては娼家をひらかせた。おキミを第二夫人として、第七夫人までかかえた」(森崎和江、136)。「おキミが到着したころは朝鮮を横断する京釜線京義線は敷設されていた。おキミは国境ちかくにつれていかれ、そこからさらに山のなかへと運ばれた。娼妓たちの小屋は、工事現場のかたわら、きりくずされた山や谷川を眼下に見下ろす崖や、ダムの上に建っていた」(森崎和江、138)。「朝鮮は独立をうばわれ、他国によって勝手きままにそのすべてをふみにじられつつあった。鉄道敷設は、いわば、その象徴だった。それは朝鮮人のために敷設されるのではない。植民たちがわたってくるためのものであった。他国の軍隊が入りこみ、全面支配をするためのものだった。朝鮮における鉄道敷設は、1901(明治34)年、李氏朝鮮の政府によってはじめられた。この年、朝鮮政府は京釜鉄道株式会社を設立した。その会社の取締役日本人三輪長兵衛が就任した。博多の大商人で、朝鮮鉄道院の創立当初から監督として朝鮮宮内府に入った人物であった」(森崎和江、138～139)。「朝鮮人工夫は日本人の監督に指図されていた。・・・かれらは家や土地を売り、山を越えて日本人の女を買いにくるのである。性欲をみたすだけではない。もっと根ふかい渴きをもって、おキミたちを苦しめた。そこには日本人への憎悪がむきだしだった」(森崎和江、141)。「このようからゆきさんの歴史にとって、日露戦争はひとつの画期であった。それは国力を強めたくにによって、からゆきさんが解放された、というものではない。アジアの北方へ流れでいた女たちが、それをきっかけに、くにの管理下にいられたのを見てわかるように、解放でも保護でもなく、不完全な支配から完べきな支配へう

つされたのである。おキミさんや大連の娼妓の姿をみればそれはあきらかである」(森崎和江、158)。「大連は植民地都市として建設が進んでいった。・・・満州鉄道は日本人の管理のもとで人や物をはこんだ。だれもこの新領土をさまよう娼妓をおもうひまなどなかった。ただわずかに大連青年会の人びとが、病娼を引き取り婦人ホームをもうけて保護していた。その婦人ホームは青年会の主事益富政助が中心になって運営していたものであった。かれらはまだ、日露戦争のころ、13,4歳の少女があまりに悲惨だと、娼楼から引きとると東京の救世軍の婦人ホームへ送りとどけた。ほかには国内にもかの女たちを保護する機関はなかった。青年会はその後も引きつづいてかの女たちを保護していた。が、東京へ送る費用と手間にことかくのと、保護せねばならない少女が多いこともあって、この仕事を39年4月救世軍の手にわたした。救世軍はこれを大連婦人救済所と改称した」(森崎和江、159)。

森崎のとりあげたもうひとりには島木ヨシである。「島木ヨシは天草の、牛深市魚貫街裏越で生まれた。そのころは魚貫(おにき)村といった。浦越浦にそったこの村にちいさな炭坑があった。ヨシはこの炭坑で6人きょうだいの長女に生まれたのである。明治19(1886)年だった。ヨシは19でからゆきとなった。ちょうど日露戦争のあとである。日露のあとの炭鉱の生活苦は天草ばかりではなかった。石炭は戦後その販路をひろげて、上海やシンガポールへも輸出されるようになったが、戦時中に出炭を急いだ反動で、坑夫たちに仕事は無かった」(森崎和江、177～178)。「ヨシはまず上海で5年ほど娼妓奉公をし、そしてシンガポールに渡った」(森崎和江、179)。「ヨシがシンガポールへ密航したころ、シンガポール政庁は同市の公娼制を廃止しようとしていた。娼妓売買でくらす西欧の男たちは20から25年の実刑となっ

た。その刑をおそれて西欧人の誘拐業者は姿を消した。また1913(大正2)年には西欧人の公娼をやめさせ本国へ送りかえした」(森崎和江、180～181)。「ヨシは外人の爪みがき店で働きながら小銭をたくわえた。したしくなったイギリス人の警官が、ヨシが望んでいるマッサージ店を持つと聞いた。ジョージという名だった。ヨシたちは家を持ち、窮迫していた日本人の女を2人やといいで、マッサージ店をはじめた」(森崎和江、181)。「ヨシは少しづつゴム園を買っていった。『南洋の50年』によれば、1905年ごろになり欧州でゴムの需要が高まり、マレイ半島にゴム栽培熱が勃興した、とある。そして2,3の邦人苦難の開拓時代がはじまっていた」(森崎和江、182)。「ヨシはインドへむかった」(森崎和江、189)。「23日ぶりにヨシは陸地をふんだ。そこはさまざまな人種が群れていて、異様な熱気があった。・・・かっとならぶような光りの中を中国人もヨーロッパ人も歩いていた・・・ヨシはこのさまざまな人種の群れに興奮した。天草では意識しなかった<日の丸>がヨシの心身をなまめかした」(森崎和江、189～190)。ヨシは「ジャパニーズ・マッサージ」をはじめたいと考えた。・・・ヨシはやといいれた3人の日本の女に、まずつぎのように話した。ジャパニーズ・マッサージは客商売じゃなかと。日の丸ば胸に治めた民間外交じゃいけん(森崎和江、190)。「民間外交ということばは日露戦争後くにの外でつかわれ出した。娼妓のあるじなども娼妓を酷使するときにつかった。が、売られた経験のあるヨシには、そのことばは特別の意味もっていた」(森崎和江、191)。「ジャパニーズ・マッサージ医院。院長ミセス・ヨシコ島木。看板にはそう書かれて開業となった。・・・店で働く娘のなかにマサという少女がいた。ヨシが天草からよびよせた子であった」(森崎和江、192)。「くらしがたつようになってヨシは結婚した。あるイギリ

ス系の船会社の事務長であった。ヨシとおないどしの45歳、学生時代に事件をおこして父親から勘当され、東南アジアを転々として20年になるという。名を秀則と聞いた。が、結婚しておちついてみると子どものないことがさみしい年齢であった。秀則に相談して、ヨシは甥の子を天草まで引きとりにでかけた」(森崎和江、201)。「昭和10年になって夫が突然モンパサの支店長に転任を命ぜられた。英領東アフリカである。・・・英字新聞は、日本が中国へむけて出兵の準備をしていると書きたてた。<いまがひきあげどきでないでしょうか>。・・・整理をいそいだ」(森崎和江、202)。

「天草は近世のころも、そのあと明治に入っても、墮胎や殺児なかったという。日本の村むらはどこでもそのような間引きをして人口をととのえてきた。でもここはその風習がなかったという。そのために人口がふえすぎて、他国への出稼ぎなしにはくらせぬようになった、と云う。殺児のならわしがなかったのは、この天草や島原がキリシタンの聖地だったからだと考えられている。天草の乱では天草の島じまや島原半島では、どの村も村びとが沢山戦死した。全壊にちかい村がいくつもあった。あまり村びとが減ったので、田畠をつくることもできなくなった。村がなりたたなくなっていたのである。そこで幕府は全国の藩に命じて、天草と島原とに、各藩から数戸あるいは十数戸ずつ、農家を移した。いうならば異郷の人ばかりが、ひとつところに顔をそろえたのである。・・・天草のぜんぶ、島原半島の全体が、新開地のようになった。・・・こうしたことがそのまま、この地方の気質の一端にかかわったというわけではない。また天草では海岸ほうと内陸とではたいそう気風がちがう。漁民と農民とは通婚しない伝統があった。島原半島も南と北とではことばも風習もちがう面があるし、やはり農漁民のあいだの

かかわりはあさかった。藩政時代に農業漁業の兼業がゆるされなかったせいでもある」(森崎和江、220～221)。

「からゆきさんは誘拐者の口車にうかうかおっているようだが、一般に国内の出稼ぎも口入屋をとすほかにすべのない時代である。まして海のとすへのさそいは、だまされるかもしれないとも、そこをふみこえねば、道がひらかれぬ。そののつびきならぬ立場にたっても、なお心にゆめを抱いていた娘たちのその幻想をおもいやる。おなごしのごとをしてもなお、その苦海を泳ぎわたって生活の場をきづこうとした人びとの、切ないまなざしを感じる。そのかたちなき心の気配。そのなかへはいつてからゆきを感じとらねば、売りとはばされたからゆきさんは二度ころされてしまう。一度は管理売春のおやじや公娼制をしいた国によって。二度目は、村むすめのおおらかな人間愛をうしなってしまったわたしによって」(森崎和江、229)。

山崎朋子の『サンダカン八番館』も貴重な調査・研究文献である。山崎がこのテーマを選んだのはなぜか。「近代日本の100年の歴史において、資本と男性の従属物として虐げられていたものが民衆女性であり、その民衆女性のなかでもっとも過酷な境涯に置かれていたものが売春婦であり、そして売春婦のうちでも特に救いのない存在がからゆきさんであるとすれば、ある意味で、彼女たちを日本女性の〈原点〉と見ることも許されるのではなからうか。従来のエリート女性史に対するアンチテーゼの序章とするのに、わたしが、製糸・紡績女工でもなければ農婦でもなく、炭鉱婦でもなければ女中でもなく、殊更からゆきさん——東南アジアへの出稼ぎ売春婦を選んだ由縁である」(山崎朋子、13)。

2人のからゆきさん、天草で生活を共にしなが

ら身の上を聴き取ったおサキさん、おサキさんの紹介で聴き取りが可能になったおフミさんを中心にしたその調査は見事なものであるばかりでなく、全体を通じた天草と海外醜業婦に関する考察は、記憶されるに値するものである。しかし、ここでは、その詳細を見る余裕がない。いくつかの視点から記述することにしよう。^{註4}

おサキの父はずっとこの村で百姓をしてきたひとであるが、おサキが4歳のときに病死した(山崎朋子、64)。やがておサキの母は叔父に嫁ぐが10年で病死する。一家(兄妹おサキ)はおサキの兄が中心となって支えるが家は貧しくおサキは学校に行っていない(山崎朋子、67～68)。おサキの姉が10歳か11歳で同じ部落の正田トイチに嫁ぐがトイチの姉に、村の者が〈おトンジョ、おトンジョ〉と呼んでいたおトクがあった。そのおトクはビルマのラングーンで女郎屋をやっていたが、おサキの姉ヨシはそのおトクに連れられてラングーンにいき娼売をするようになった。おサキの家内では外国に大勢だしていた、「家の家内〈やうち〉でも、随分外国さん行っとる。まず、うちのヨシ姉じゃろ。お父つさんの一番上の兄さんの娘にハルという子がおっての。・・・そのハルがラングーンに20年行っとるし、その伴合になった良治という男は島原者じゃが、これも長く南洋におった。ヨシ姉の初手の伴合だった船乗りも南洋で働いとったし、二度目の御亭主の正田カイキチはラングーンで女郎部屋の番頭で、その妹のおナミさんとおヤエさんはそこで娼売に出ておったもん。うちの伴合になった北川新太郎も、外国仕事の男だったし、徳松伯父の頭むすめも、さっき話したとおりのお女郎に出ておった。・・・うちが外国へ行くことになったのはな、ちょうど10になった年じゃ。・・・となり近所の姉さんたちが、大金もろうて外国へいきよるば見ておって、子ども心にも、おなごが外国さん行けば、兄さん

は田畑は買うて、太か家ば建てて、良か嫁ごば貰うて、立派な男になれると思うてな、じゃっけん、うちが外国さんいくことにしたとよ」(山崎朋子、72～74)。山崎朋子の作成する北川サキの系譜は、北川サキの系譜を超えて、天草の理解に役立つであろう(山崎朋子、75)。

おサキの行き先はサンダカンであった。「サンダカンには、日本人のやっつる女郎部屋が一番多くて、9軒あった。・・・9軒あった日本人の女郎部屋には、宿屋のごたる名前はついとおらんで、一番館、二番館、三番館、四番館…と番号で呼ばれておった」(山崎朋子、84)。「お娼売に出るまでは、こげな暮らしばしとったけん、うちらは、南洋さん来たこつばふしあわせじゃと思わんかった。お姉さんたちのしておるお娼売がどげな仕事か、ようわからんちゅうこともあったが、とにかく、朝、昼、晩と白か飯食えたもんな。天草におったら、白か米めし食うとは盆正月と鎮守様のお祭りだけじゃったし、うちのごたる親なし子は、その日だつてろくろく口にははいらんだったもんが、明けても暮れても食えるんで。・・・おかずには、魚さえ膳にのぼったと。天草は四方が海じゃし、うちらは村は崎津の港からじきじゃとに、うちらは魚なんぞくったことはなか」(山崎朋子、88)。

おサキが客をとる(とらされる)ようになった後、木下クニとの出会いや八番館での娼売の日々に関する記述は省略する。「うちが中戻りしたのは、ミスター・ホーム(おサキの奉公先のイギリス人)が休みば貰てイギリスへ帰って来ることになったからじゃった。・・・10近いときに村をでたっじゃけん、10幾年ぶりに見る生まれ故郷たい。・・・村の者のなかには、<おサキさん、もう遠か外国さに行かんて、天草におりなっせ>と言う者もあったが、うちの気持ちよくおれる場所はどこにも有り申さん。サンダカンへ戻ればおクニさんが

おるし、同輩のおフミさんもおシモさんもおるけん、うちのおるところはやっぱりサンダカンじゃ思うて、半年たつたたぬうちに南洋行の船に乗ったと」(山崎朋子、127～129)。山崎によるおフミさんの聴き取りも紙数の都合で省略しよう。

3. 海外醜業婦と天草の経済と社会

森の研究や、森崎、山崎の調査に見たように、天草の海外醜業婦の背景には天草の経済と社会があった。天草における海外醜業婦は天草の厳しさを背景に誕生していたのである。ここでは、森や森崎、山崎の研究を念頭におきつつ、若干の文献資料により、天草における経済と社会を補完的に観察しておくことにしよう。

「キリシタン乱後の天草では、定浦制度」が定着する(北野典夫、下巻、8)。この制度は「定浦の人々でなければ、本格的に漁業を営むことを許さない」というものであった(北野典夫、下巻、8)。「特権的定浦集落は船津と呼ばれた。船津はおおむね一年交代選挙制の弁指が支配し、富岡には、世襲制の郡中総弁指(中元家)がおかれた。弁指とは、網元、あるいは漁撈指導者に対する尊称であるが、江戸時代には、定浦の行政職名としても採用されたのである。船津の行政は、村庄屋と浦弁指による二重支配の構造になっていた。弁指と網元や漁師との関係は、一面主従、一面親子のような間柄であった。弁指は、漁場や操業上の紛争調停をはじめ、船津の生活全般を取り仕切った」(北野典夫、下巻、11)。「江戸時代、天草漁業が、定浦制度の下で、いかに活況を呈していたか。天保9年(1838)の『両御巡見御尋之節心得向』の中で<村々漁師ども取り揚げ候魚類>として、天草灘側の<西筋にては、鰹、鱈、鯛、そのほか鯛、瀬の魚、取り上げ申し候>有明海、不知火海側の<東筋にては、鯛。この白、白魚、貝類等、取り上げ申し候>といった賑やかさであった」(北野典

夫、下巻、14)。

「もっとも、それならば、船津の民は常に豊かな生活をいとんでいたか、それは疑問である」(北野典夫、下巻、15)。「江戸時代も終末期に近づくと、さしもの定浦制度もその根底がゆらぎはじめてくる。それは、幕藩体制の脆弱化にも起因するわけだけれども、最大の原因は、いよいよ深刻化した天草島の人口問題にある。人口圧は、さらに狭隘な農地の細分化と、ひいてはなだれ現象のような百姓漁師の激増をもたらし、これが定浦漁民の特権をおびやかすようになってくるのである」(北野典夫、下巻、38)。「人口圧は、農村部のみでなく、定浦自体が抱きはじめた社会問題であった。…捨て子事件が散発し、定浦集落の船津でも一家をあげての逃散がみられるようになってきた」(北野典夫、下巻、39)。「とにかく、封建時代の定浦制度は、明治維新によって近代漁業制度にきりかわっていく。・・・ようやく自由操業の時代がやって来たのである。天草の過剰人口一零細化した農民層が、有明海、不知火海、天草灘にながれこみはじめる。・・・かくして、牛深の川端屋などを頂点にして、天草漁業は、沿岸、沖合にわたって全盛期に入るのである・・・しかしながら天草漁村の社会構造を考えた場合、一言にしていえば、いわゆる“半農半漁”の村々がその過半を占めていたことも事実であり、漁家の生計は、男の沖稼ぎにあわせて女のメゴイナイ(魚類行商)と段々畑のカライモ作りに支えられる時代が、以来、大東亜戦争後の高度経済成長期にいたる100年にわたってつづく。天草のうみは豊かで、漁業は殷賑をきわめた。しかし、漁民の暮らしむきは極めて厳しかった」のである(北野典夫、下巻、52～53)。

以上の指摘からも推察されるように、天草の貧困を語るとき見逃せないのが、特権的階層と狭量にして生産性の低い土地と過剰人口である。特権

的階層に対する憎悪は時に一揆や直訴・越訴となつて現れた。弘化一揆(弘化4年1847)はそのひとつであるが、「天草では、大規模小規模の一揆が頻発していた。それは、一般農民層の極度の貧窮化、零細化とは反比例して、天草の富を独占して太ってゆく大小の銀主邸打ちこわしという形をとった。江戸時代、とくに天領(幕府直轄地)の田畑は永代売買禁止と規定されていた。しかし、生活困窮の百姓たちは、農地を質に入れて銀主(ぎんし)と呼ばれる大金持ちたちからの借金を重ねていた。一度借金すれば、到底、返済することが不可能に近い利子がついた。・・・かくして、質入れの質流れの形で先祖持伝の田畑を手離さざるを得なくなった百姓たち。両者の激突は必然であった」(北野典夫、上巻、3)。天草の貧しさは、そうした特権的階層の存在に、過剰人口という問題が加わってより深刻なものになる。万治元年(1685)1万6千人にすぎなかった天草の人口は、その後、「自然増加がすすみ、・・・寛政6年(1794)には11万2千余、・・・天保3年(1832)には14万3千8百6人になっている。・・・この趨勢は、さらに慶応4年=明治元年15万6千1百68人、大正13年(1924)19万5千3百44人と倍増のカーブを描く。この天草における人口爆発の現象は、全国的に見た場合、特異な現象であった」(北野典夫、上巻、14)。「耕地面積と生産高に比べてバランスを完全にくずした過剰人口。<おるもわるも三反百姓>、耕して天に到る段々畑<くじょうじょ(常々)カライモ、イワシのシャア(お菜)米食わん、チン米<くわん>、これが天草における村々の風景であり、生活の実態であった」(北野典夫、上巻、14)。もちろんこうした天草の事態を何とか改善しようとした人もいた。宝暦12年(1762)、同村内の皿山に陶山を開き、肥前より陶工山路幸右衛門を招き、陶石を利用して陶器製造を開始した上田家の6代目の傳右衛門(万

治元年（1658）8月以降、代々同村の庄屋）の例はそのひとつであった（森克己、25～26；再出）。

それにしてもまちがいなく天草は貧しい。『高浜村明細帳』によると、当時の高浜村の状態は百姓160軒に対し名子、無高水呑百姓らの下層民が102軒であったものが、それから30年下った寛政3年（1791）には百姓122件にたいし、名子、無高水呑百姓が200軒となり、下層困窮者が全村の3分の2を占める累増ぶりをしめしたことを記録しており、明和3年（1766）に江戸から長崎へ派遣された幕府の役人も、当時の天草の貧しさに驚きのあまり呆然としたことが『福連木村他国出稼人取調帳』にのこされている。海にかこまれている以上、生業を海にもとめればよさそうなのであるが、天草はむかしから牛深をのぞいては良港にめぐまれず、漁業もはなはだふるわなかった」（宮本常一（1）、343～344）。宝暦11年（1761）の幕藩時代天草は決して豊かなところではなかった。そうした天草の実態を専門家は次のように捉えている。「天草では<島原の乱>後の処理が島原藩よりやや遅れて実施された。・・・天草の最初の公的検地は・・・「慶長肥後国絵図」で寺沢広高の提出によるものであり、その後二代堅高の内検による増石高を島原の乱後、天草は山崎家治の支配する処となるが、検地改訂は行われておらず、わずか3年で天草は幕府の天領となった時点で鈴木重成の支配下に入る。・・・鈴木重成、重辰親子二代にわたって、天草の石高改正を訴え、ようやく万治2（1659）年、島原の乱後21年目にして検地改正の許可を幕府から得られ、いわゆる天草の「石半減」が実現されることになったのである」（高木繁幸、186）。「島原大変（寛政4、1792年）は天草にも大きな被害をもたらしたうえに田畑の年貢率は高率であった。「土地等級の細分化により、また検地見取りにより、村公称石高に対し年貢率が高く、特に畑年貢は異常に高率

であったこと、加えて・・・雑穀年貢も徴収されていた。・・・そうした中で、天候不順で不作・凶作となればすぐ飢餓の状態に陥るのである。・・・島原の子守唄にみられるように、年貢が納められないため地主の家へ幼い子が子守奉公に出されたのはまだよい方で、家の借金の肩代わりに娘を売らなければならない家庭もあった。行く先は国内にも国外にも特に東南アジア方面には多かった」（高木繁幸、194）。天草の貧しさは天災・人災の帰結であった。

天草の貧しさは戦後にまで続く。「大小120余の島嶼からなる天草の生産構造は、半農半漁と出稼ぎである。・・・副業としての漁業は食うためのぎりぎりの手段であった。半農半漁の生産構造は生活の必然として生まれたが、この場合、漁業はあくまで補助的なものでしかない。漁獲方法も、無動力船による延縄、一本釣りなど、幼稚で小規模なものである。しかもかぎられた湾内外の漁業はたちまちゆきづまり、生活の困窮はつのるばかりである。地曳網、八田網などが沿岸漁業として発達したが、人口の増加はますます生活の貧困に拍車をかけた。その当時のうたに、チーン（珍しく）米食わん チーン米食わん ジョウジョウ（常々）カライモ（甘藷）に 鯛のシャー（お菜）米が食卓を飾ることはない。白い飯がぞんぶんに食える冠婚葬祭を、指折り数えて待ちわびたのは老人や子どもたちばかりではなかったのである。この貧窮の突破口を出稼ぎにもとめたのだ」（宮本常一（2）、140）。

4. 海外醜業婦と日本社会の病理性

— 結語に代えて —

からゆきさんを生んだ背景には貧困な天草があった。それはまちがいない。しかし、俯瞰すれば、それは世界列強のアジア進出と帝国主義の帰結でもあった。からゆきさんは帝国主義の一翼に

日本が名乗りを上げ、アジアに向けて経済進出をした、その歴史のなかに出現した。清水洋・平川近均の『からゆきさんと経済進出—世界経済のなかのシンガポール・日本関係史—』（清水・平川、1998）は、からゆきさんを世界経済との関係で、その詳細を捉えた書物である。

小論は、からゆきさんを扱った多くの研究の中から、森克己・森崎和江・山崎朋子の著作をとりあげた。ここでは取り上げていないが、大場昇『からゆきさんオキクの生涯』（大場昇、2001）は見逃すことのできない力作であるし、倉橋正直『北のからゆきさん』（倉橋正直、1989）は満州など北の「からゆきさんに」目を向けた注目作である。倉橋には『島原のかたゆきさん』（倉橋正直、1993）もある。円地文子『南の肌』（円地文子、1978）はからゆきさんの物語で、からゆきさんのすぐれた案内小説であるし、宮崎康平『からゆきさん物語』（宮崎康平、2008）は実録を下敷きにした小説である。ここでそれらを外したのは、もっぱら紙数を考慮してのことである。

ところで、森の著書が、はしがきに、「人身売買はいつの時代にもあったし、いまなおその跡を絶たないのである。そのうちでもいわゆる〈天草女〉の場合は、海外に売り飛ばされた婦女子の問題であるだけに、特異な人身売買であるとともに、国際的にも、歴史に残した日本の恥すべき汚点であった。しかしたとえ汚点であっても、歴然たる歴史的事実である限り、〈臭いものには蓋をする〉主義であってはならない。事実が事実として認め、さらに一步踏み入って、どうしてこうしたことが行われたかという社会悪の根源を抉り出し、反省と対策に資することこそ歴史学者としての当然の義務である」（森克己、はしがき、前出）と述べていたことを想起しよう。われわれは森の主張に同意して本論を構想した。われわれは、この小論の結語を書くに当たり、小論の目的が、森

のいう、〈社会悪の根源〉を確認することにあつたことを改めて意識することにしよう。^{註5}

(1) 国家・権力と民衆

人身売買の根絶に関して言えば、これまで、全くその努力がなかったわけではない。人身売買は世界的に関心を集めてきた。「人身売買の問題を国際的に最初にとり上げたのは、1899年（明治31）開催の白人奴隷売買禁止に関する国際会議で、これに関係のある諸国各種の篤志団体の事業を統一補導させるため、右禁止事務局をロンドンに特設した。そしてその活動によって1904年（明治32）5月南米ブラジル及びヨーロッパ14ヶ国政府がパリに集ってはじめて醜業婦取締条約を締結し、署名批准を経て翌年から実施し、アメリカも1907年（明治40）これに加盟した」（森克己、226）。「以上はいずれも第一次世界大戦前の条約であるが、終戦後国際連盟が成立すると、連盟規約第23条に、右2条約を取り入れて、〈婦人及小児の売買に関する取極めの実行に付一般連盟に委託すべし〉との一項を入れ、平和条約第282条にも醜業を目的とする婦女売買の禁止に関する前後2条約は対独条約締結連盟国に本条約実施の時よりこれを適用すると特筆した」（森克己、227）。

日本はどのように対応したか。「大正9年（1920）9月、愈々第1回の国際連盟総会で婦人児童売買禁止問題が上提されることになり、出先のわが全権からいろいろの意見を求めて来たので、外務省から内務省に移牒したところ、内務省は右条約にはわが国もまた加入することが適当であると立派にいい切ったばかりでなく、加入の結果海外から送還されるわが醜業婦に関しては、本省では相当の準備をし、漸次保護事業の徹底を期する積りだと述べ、さらに警保局の意見として、明治5年（1872）の太政官布告以来、内務省令等もあって、わが国では人身自由の拘束を容さず、ことに婦女

売買の事実は厳重に禁じていると申し添えた」(森克己、227～228)。ところが、「こうした立派な言葉が舌の根も乾かないうちに、内務省内部で異論が起り、外務省を通じて前言を取り消すことになった。その理由は、わが国現行の娼妓取締規則ではたとえ未丁年でも満18歳ならば娼妓稼業ができるのであるから、今日この娼妓年齢を満20歳以上に高めることは不必要且不適切であるというのであり、且つ覚悟をもって、＜我が国の公娼は全く自由稼業で、楼主との雇用契約中にも娼妓の意思を拘束して売淫を強制する如き約束は無いから1910年条約の第1号には該当せぬ。併し今回の会議で該当するものと解釈規定せられたならば本条約への加入を保留したい＞と意思表示したのである」(森克己、228)。

こうした動きを示した日本であったが、東南アジアの現地ではどうであったか。すでに森の指摘を借りてみてきたところである。

森の指摘から読み取れば、天草女、海外醜業婦の凋落＝終焉は、断固たる国家の意志に導かれたものでないことは明らかである。むしろ、世界先進国の仲間入りをした日本が、海外の評価を意識して廃業させたというのが真実に近い。からゆきさんの問題の背景には国家の意志が存在すると森崎も指摘する。「私がここで公娼制をとりあげたのは、それがからゆきさん続出の背景の一端となっているからである。誘拐者の親分の多田亀の動きをみても明らかなように、以前から国内の遊郭と国外の娼楼とは強く結びついていた。公娼制は国が認めている売春の制度であったから、海外の娼楼に女をつれだすことをだれもとがめない。・・・しかし、問題はそこにとどまらない。・・・海外出稼ぎに関する＜移民保護法＞が定められていた。それには、売春業者ならびに娼妓の渡航はみとめられてなかった。にもかかわらず、その後も関係者はいくらか海をむこうにわたっていたの

である」(森崎和江、115～116)。国家は＜移民保護法＞に対しても不誠実であった。

敷衍しよう。「日本人、天草人のアジア大陸進出は、先ず朝鮮半島に始まり、やがてシベリアに及び、満州、華北へとひろがっていった。その背景には、日本の軍国主義があった」(北野典夫、下巻、117)。「そのような中、西海僻遠の島天草は、東京に遠く、アジア大陸に近い、天草灘側に住んでいる人々は、＜わしどみゃ、毎朝、上海の鶏のコケッココーで目を覚ますとですばい＞このような冗談をよく言う。・・・男も女も、隣家を訪れる気安さで、信玄袋一つをぶらさげ、あるいは柳行李一つかついで、玄界灘を越え、東支那海を渡って行ったのである。天草の民は、太古以来、眼前にひろがる海の涯には、アジア大陸が横たわっていることを知っていた」(北野典夫、下巻、117)。「天草は海外発展の島・・・。赤嶋伝三郎のように成功して錦衣帰郷した男たち、また毛色の違う旦那さんを伴って帰り、晩苑を故郷の村で平安に、あるいは一種の思いにひたりながら過ごしたカラユキさんたち。そんな話題がいくらかころがっており、しばしば新聞のトピック欄を賑わした」(北野典夫、下巻、294)。天草の民衆はそうした存在としてそこにあった。もちろん、天草から海外に出て行った女たちがすべて醜業婦であったわけではない。北野典夫は、「大部分のカラユキさんは、正規の手続きを踏んだ海外渡航者であり、また、人身売買業者の手にかかって賤業に従事していたのは、ほんの一部にすぎなかった」(北野典夫、下巻、294)と主張する。^{註6}

一方、醜業婦となった人たちも、多くは、醜業婦となることをまったく想像もしなかった人たちである。結果的にからゆきさんとなった女たちは誘拐されたり、女衞の甘言に乗せられて日本を離れたのであろう。その後、彼女たちを待ち受けていた状況はさまざまであるが、彼女たちは、自ら

が自覚するのとしなひのかかわらず、娘子軍として、日本の海外進出の先兵とされたのである。矢野暢夫の表現を借りれば、<娘子軍と称された醜業婦を含む女たちは少数先駆者に先立つ南洋開拓者>であった。

アジアの英領植民地では、日本の開国以前から公娼が制度的に存在した。「日本人娼婦のほとんどが密航者としてやってきた。・・・彼女たちの出身地が主として長崎県島原地方と熊本県天草郡であったことはよく知られている。・・・彼女たちが日本で「娘子軍」と呼ばれるようになったのは明治30年代の初めからである。それ以前にも現地の在留邦人はおおむね「娘子軍」と呼ぶならわしであった。「からゆきさん」という呼び方は、むしろ南洋の現地で使われた表現ではなかった。彼女たちを抱える楼主のことは「ピンブ」と呼ぶ習慣であった」（矢野暢、32～34）。

矢野暢は「娘子軍」の果たした経済的役割に注目を促している。「シンガポールに限らず南洋の各地において、大正の始め頃までは、在留邦人の統計をとると、女子人口のほうが男子人口を上回る状態が続いた。娘子軍の存在はたんに風俗的意味をもったというよりは、初期の在留邦人社会では、むしろ経済的な意味を帯びたことのほうがもっと重要であった。娘子軍に「寄生」するかたちで邦人の商業活動が形成発展を遂げていったからである。なかでも、呉服屋、日常雑貨商、旅館業、医者、そして写真屋、洗濯屋、鼈甲細工屋店など、すべて娘子軍の繁栄に「寄生」するかたちで発生したのだった。日露戦争直後の最盛期には、スマトラのメダン付近まで含めて、6千人の娘子軍が年にゆうに1千万ドル（1904年当時、1ドルは約2円であった）。したがって約2000万円に相当する収入を得ていたという」（矢野暢、35）。^{註7}

それにもかかわらず、日本領事館は娘子軍の派手な存在を敵視した。「彼女らの存在を最初から

国辱的存在であるとみなし続けていたが、日露戦争の勝利以後、日本の国家的威信がたかまり、また在留邦人の権威が「正業」優位の方向に向かい始めるとともに、廢娼を実現しようとする外務当局の意向はにわかに強まることとなった。そこで日本領事はシンガポール政府にたいして執拗な働きかけを行った。その結果、まず大正3年4月、政府によって「ピンブ」狩りが行われ、日本人男性楼主72名（一説には40名）が英領マレー全土から退去命令を受けた」（矢野暢、35）。南洋開拓の先駆者であった娘子軍は国際社会の動向に反応した国家によっていまや敵視された。娘子軍は国家のご都合主義に振り回され、その存在が、そもそもの始まりから国辱的であったかのごとく扱われることになった。このことは忘れてはならない歴史的事実である。国家とはそのようなものであり、民衆とはそのようなものであったことを記憶しなければならない。「大正9年1月、新嘉坡（シンガポール）総領事山崎平吉は、各地日本人会長の集まった席上、本年10月を期して、管下各地の娘子軍を追放する旨を発表した。娘子軍と関係ないものは、勿論これに賛成した。賛成どころではない。極力これを指示し応援した。万難を排しておやりくださいと鞭撻した。大正3年、藤井領事は、新嘉坡政庁の協力を得て、彼女等に喰い下がっている多数の嬪夫を放逐した。それ以来、嬪夫と名のつくものは、表面影をひそめた訳だが、しかしこれに類するものは絶無でなかった。ただそれが絶無でなかったばかりでなく、明治初年以來、娘子軍の培って来た深い根は、いろいろな方面に密接な関係をもっていた。彼女らの存在に、商売の基礎を置く商人もいた。彼女らから資本を得て、事業を続けているものもいた。だから山崎総領事が、これが放逐をするためには、余程断固たる決心を要した。・・・当時新嘉坡総領事の管下に、どの位の娘子軍がいたのであろうか。山崎

の右の声明の2年前、即ち大正7年の数字によると、芸者、娼妓、酌婦の数1千6百93人となっている。芸者は即ち芸者であって、娘子軍というのではないであろう。しかしこの数字の大部分がいうところの娘子軍であることは事実である」(入江寅次、227～228)。「娘子軍の陣営は消滅した。明治以来の彼女らの地盤も4分5烈だ。官憲の目を盗んで従前のそれとは異なった形式に於いて、これを継続するものは皆無ではなかったが、多くは日本に帰るとか、又官憲の手の届かぬ奥地に入るとか、急に夫を持つとかして、とにかく颱風一過の観を呈した(入江寅次、229～230)。官憲の手の届かぬ奥地に入った娘子の中には当然帰国のかなわぬ者もいたであろう。「今度の第2次世界大戦に南方に遠征したわが軍人や民間人たちが、南方の土人のなかに発見したという天草女たちは、第1次大戦以前に渡航した天草女たちの老年の姿である」(森克己、233)。

以上のような事情と重なるが、娘子軍の存在をめぐっては、是非とも忘れてはならないことが一つある。それは、南方における娘子軍を眺める正統的日本人の眼であった。「島村抱月の滞欧文談(抱月全集第5巻)には、明治35年にシンガポールで体験したこととして、次のようなエピソードがある。「例の馬來街というのを過ぎる。怪しげなる洋装をして、髪は仏蘭西巻といふにかぶりたる日本婦人の3人5人・・・一行の人々車上より指願して、国辱なりと罵るものもあれば、国益なりと笑うものあり。・・・これをかりに「国辱派」の典型的な認識であるとする、逆に「国益派」の方は福沢諭吉で代表されていると思う「時事新報」(明治29年1月18日付)に書いた「人民の移住と娼妓の出稼」という評論の中で、福沢は、娼妓の海外への出稼ぎは日本の「経世上必要な可」と真面目に説いている」(矢野暢、37)。「娘子軍」をみる正統派日本人(矢野暢のことは)の目は冷

ややかなものであった。山崎朋子が、研究者の目に同情を見て人間的価値の問題を見逃しているというのも、研究者に限られたことではない(註5を参照)。それは、おそらく、一般国民、とりわけ天草の人々のまなざしであった。そのことは、何よりもよく、帰国したからゆきさんが南洋での半生を黙して語らなかつたという生き方に見ることができるであろう。

(2) 特権的階層と風土

天草が出した娘子軍の背景には貧困があった。そしてその天草の貧困の背景には、特権階層に依る搾取と天草の経済・社会を貫いている格差と差別の構造があった。すでに見てきたように、「キリシタン乱後の天草では、定浦制度」が定着する。この制度は<定浦の人々でなければ、本格的に漁業を営むことを許さない>というものであった。特権的定浦集落は船津と呼ばれた。船津はおおむね一年交代選挙制の弁指が支配し、富岡には、世襲制の郡中総弁指(中元家)がおかれた。弁指とは、網元、あるいは漁撈指導者に対する尊称であるが、江戸時代には、定浦の行政職名としても採用されたのである。船津の行政は、村庄屋と浦弁指による二重支配の構造になっていた。弁指と網元や漁師との関係は、一面主従、一面親子のような間柄であった。弁指は、漁場や操業上の紛争調停をはじめ、船津の生活全般を取り仕切っていた」(北野典夫、下巻、11、再出)。上の指摘からも推察されるように、天草の貧困を語るとき見逃せないのが、特権的階層の存在と、それを許してきた社会構造である。「江戸時代、とくに天領(幕府直轄地)の田畑は永代売買禁止と規定されていた。しかし、生活困窮の百姓たちは、農地を質に入れて銀主(ぎんし)と呼ばれる大金持ちたちからの借金を重ねていた。一度借金すれば、到底、返済することが不可能に近い利子がついた。・・・か

くして、質入れの質流れの形で先祖持伝の田畑を手離さざるを得なくなった百姓たち。両者の激突は必然であった」(北野典夫、上巻、3、再出)。

天草の貧しさは、そうした特権的階層の存在に、過剰人口という問題が加わってより深刻なものになる。しかし、それだけではない。天草の貧しさの背景には、したがって天草女=娘子軍の背景には、さらに、天草の社会がもっていた文化や風土がある。「私が生まれましたのは、熊本県の不知火海の中の小さな島である天草、天草の乱のありました天草です。両親とも天草です。天草というところは離島の典型の姿をしております、近ごろ“辺境”という言葉が流行りますが、一種の辺境です。そこで生まれた人間たちは、人口が多くその島で自給自足できないものですから、長男というか家を継ぐ後とりを残して全部、島を出ていかなければならないという運命があるわけです。で、そういうところで生まれましてたから、当然私の母も父も天草を出る運命を担っていて、私が生まれて3ヶ月ぐらい経ちましてから水俣に移ってまいりました」(石牟礼道子編、15)。「小さい時からの生い立ちを考えますと、私の近所の村、海辺の小さな村なのですが、その村には一軒一軒の家の由来、出自を名乗る呼び名があるんです。「あそこの家は薩摩流れじゃ」とか「あそこの家は天草流れじゃ」とは「あそこの家はアメリカ流れじゃ」とかいうんです。それはどういうことかといいますと、薩摩にすることができなくてきた人たち、天草にすることができなくて流れてきた人たち、それから天草から遠いアメリカやアルゼンチン、南洋、フィリッピンなどに出ていったが、そこにすることができなくて帰ってくるか帰りつくことができず故郷の近くに舞い戻ってきた人たち、そういう人たちが定着して、一軒の家が始まり、村が始まっていくというような出自由来が明らかになる、それをあらわす言い方である

わけです」(石牟礼道子編、15)。^{註8}天草の貧困を深い所で包んでいるのは、天草の経済・社会を貫いている格差と差別の重層構造であり、その格差と差別を日常化させてきた風土であった。天草の社会には、搾取の構造を不合理と意識させる以前に、おかれた境遇を「恥」と考えさせ、底辺に置かれた自己の境遇を甘受させる文化・風土があった。そこには、搾取のシステムと格差と差別の構造を変革するという意識は生まれえない。貧困は貧困という状況の固定化を促して人々を解放することがない。しかし、岡本達朗はそれがまちがいであると主張する。「貧しいという事は、恥かしいことではない。その中で、いかに生きたかが問題なのだ。村岡伊平治(島原出身)ら人身売買業者どものことはさておき、彼女たちは、泣き言も言わず、へこたれもせず、みずからの人生を大海原の彼方へ飛雄させた。異国人への売春という<破天荒な挺身行為>に、わたしはむしろ、天草人の特性である勇気とバイタリティーを学ぶ。懦弱な精神で、決行できることではない。よしんばそれが、底辺女性史的表情をもっていたとしても、彼女たちには罪はない。けっして、天草の恥などではない。その時代が、余儀なくさせたことである」(岡本達明、5)。この主張は、一面、天草の経済・社会を貫いている格差と差別の構造に対する批判であるが、もう一面では、周縁状況をにひたすら耐えて苦境を生き抜いてきた、天草人=天草民衆への暖かな心配りである。天草の民衆は穏やかでむしろ生命への意識=命の意識が明確であったとさえいえることができる。どうしてそのような民衆が生まれたのか。「天草は近世のころも、そのあと明治に入っても、墮胎や殺児がなかったという。日本の村むらはどこでもそのような間引きをして人口をととのえてきた。でもここはその風習がなかったという。そのために人口がふえすぎて、他国への出稼ぎなしにはくらせぬように

なった、という。殺兇がなかったのは、この天草や島原がキリシタンの聖地だったからだと考えられている」(森崎和江、219～220)。この理解が真実であるかどうかはわからない。しかし、検討に価する見方である。

(3) 偏見と差別—女衞の社会病理学—

世界中、周縁を生きた人々の生き方と権力を持った支配者たちの生き方には、それぞれ、共通するものがある。恥や国辱という言い方で周縁におかれた人間を蔑む姿は、世界中いたるところで目撃することができる。仮に、からゆきさんが「国辱」的存在であるならば、その制度の下で、甘い汁を吸ってきた支配者たちの生き方はどうか。そうした制度と支配層の生き方こそ「国辱」である。その「国辱」は社会と国家が生み出した社会病理である。娘子軍は海外に於いて醜業に従事したが、既に国内には醜業婦が存在した。それは権力=国家・政府が公認してきたものであった。森崎和江は、公娼制をとりあげて、それを取り上げたのは、「それがからゆきさん続出の一端となっているからである」(森崎和江、115)という。われわれの見方によれば海外醜業婦の問題は、国内の娼婦制度と共に、日本社会の構造的病理である。海外醜業婦や娼婦の問題を、特定の人、特定の個人、たとえば天草女の問題とみることは本質を見誤る恐れがある。構造的病理とはなにか。それは、既に問題の所在でふれたように、社会構造に根差したところの矛盾=構造に内在する矛盾=社会問題である。その病理の生産は、支配—被支配の構造と民族の文化的特性に根差している。したがって、その構造が創られた歴史は古い。しかし、その根底にあるのは、女性をくもの>と見る観念であり、女性を差別しようとする意識と行為である。谷川が、敢えて、娼婦論を展開する意図がそこにある。^{註9}

おそらく、性の問題にかかわる偏見と差別は、

支配と秩序を必要とする人間の集団生活とともに旧くからあるにちがいない(Frazer, J.G.、=永橋卓介訳)。あまり飛躍させずに、話を天草に戻そう。「不知火海は、熊本県の西海岸と天草島との間の海である。不知火海の沿岸では、今日でも古風に、漁民のことを「舟人」(ふなと)といい、漁民の住む部落を「舟津」(ふなつ)という。・・・舟津は路地一つ、あるいは川一つ隔てて、百姓部落と接続している。たとえば天草下島東海岸のほぼ中央にある、宮野河内という古い舟津を訪ねてみると、山のせった海沿いに家々が並び、溝のような小さい川を境に、左側が百姓部落、右側が舟津であり、ほんの少し行けばまた軒を接して百姓部落となるのである。しかし、そのわずか数尺の川または路地一つで、言葉が違う。顔つきまで違うという人もいる」(岡本達明、21～22)。「水俣の人に聞くとこういう。(水俣)の舟津で所は、一口に言えば、水俣の人種、全然離れた違う人種ち、見方をして良か如(ご)たるな。近親結婚で血はよう濁ってしもうとととじゃなかるうかと思うな。天草でも舟津という地名のある所は、顔ば見てみなっせ、みんな違うばい、その付近の人たちの顔立と。水俣に来ても水俣の舟津に行ってみれば顔立ちが違うもん、今子供たちはそげん事はなかばってん。言葉聞いても全然水俣弁とは別でしょうが。あそこは水俣弁じゃなっかですけんな。本当に水俣と一線引いてしまったような形の部落じゃモンな。一つの法律じゃろか、一つの掟て、いうんじゃろか、そういうやつがあったじゃなかるうかと思う。昔、一天草の漁民の原点は、天草の乱後の幕府の漁政にある。1万2千余名の天草島民が原城に殺され、村々に人影なく島の大半が亡土と化した後、徳川幕府は天草を天領とした」(岡本達明、22頁)。「この前近代はどのように近代に引き継がれたか。一言でいえば、農民、漁民間の通婚の途絶であり、漁民の被差別民化である」

(岡本達明、23頁)。どうしてこのような漁民の被差別民化が生まれたのか。岡本は、「不知火海の場合、漁民に対する意識を形成した要因は、農、漁の本質の差、疾病、貧困の三つであるという」(岡本達明、24)。

からゆきさんはスティグマを背負う人となった。自分たちと異なる経歴を持つ人々を、たとえ消極的ではあれ、〈距離〉をもった対象、もっと強く言えば〈排除〉の対象とした。日本中が、彼女たちにスティグマを刻印した。娘子軍や天草女の問題は、これを単に天草やからゆきさんの問題としてみることはできない。南進する国家の先兵として働いた彼女たちを国辱として虐げる民族・国家が、装いを新しくして、民主国家となったところで、われわれの社会と国家が抱えていた病理性を克服したことはないであろう。自由なる民衆(大塚久雄)の創造は、日本の社会と国家が、周縁の再生産を実現し、周縁に生きる人びとを構造化する体質を維持する限りその克服は難しい。この問題との格闘が一過性のものであってはならないことが明らかである。

最後に、女衞といわれた人々についてもふれなければならない。「日本国内では女衞とか忘八と呼ばれていた人たちも、国外ではピンブと蔑まれた人間であった」(大場昇、97)。醜業婦がつくられる背景には、周縁を創造する社会がある。女衞はそうした社会に、あるいはそうした状況の下で登場した。女衞を悪者として批判することは容易である。事実、女衞は非道なる要素をもった人間であった。弱者の弱みにつけこんだ人身売買の支配師である女衞はまちがいに醜業婦=人身売買に寄生する悪人である。村岡伊平次にしても、善意の仮面をかぶりながら「村岡誘拐団」を発足させて女郎部屋を経営するその手口はいかにも悪質であった」(宮本常一(1)、353～376)。しかし、そう批判しただけでは女衞の本当の姿を見ること

は不可能である。海外醜業婦である娘子軍とそれに寄生した女衞を生贄にして紳士淑女を気取ってみても、あるいは低級な民族国家を如何に立派な人道国家に仮装させてみても、問題は片付かない。なぜならば、それではこの問題の本質が解明されていないからである。娘子軍や女衞にみられる近代日本の恥部=病理性は娘子軍が創り出したものでもなければ、女衞といわれるピンブが創り出したものでもない。それは民族の歴史の深層部に宿され、近代において明治国家と明治政府の南洋=海外進出政策の一環として、あるいは民衆に対する差別政策の一環として、意図的に創りだされ活用された構造的=制度的な産物であり、日本の社会と国家の病理である。それを〈個人〉や〈特別な人間〉の逸脱行為というような概念によって説明し尽くすことは困難である。近代に限定して言えば、日本の恥部といわれる娘子軍もそれに寄生した女衞も、〈大日本主義〉(松尾・石橋、101～128)の帰結であった。それは、差別と偏見に支配された歴史が生んだものであった。圧倒的多数の名もなき民衆がごく少数の権力者や支配者に従属した歴史が生んだものであった。

女衞は複数いた。そのなかで村岡伊平次は『自伝』を持ったこともあって代表的存在と見られている。『自伝』の中のかれについては先に見た。その『自伝』によれば、村岡には、醜業婦となった人間の生血を吸った一面と、彼女たちに尽くし支えた一面がある。村岡伊平次の自伝はそれが自伝である限り粉飾は当然予想されるところであり、全面的に信ずることはできない。矢野暢によれば問題の箇所が散見されるという(矢野暢、2009)。矢野は村岡の『自伝』を評価しない。「『村岡伊平次伝』を信頼に足る歴史の一次資料として位置付けることは、躊躇しないわけにはいかない。私の正直な気持ちをいえば、この本の文章の一行たりとも、過去の事実の検証のために用いる気にはな

れない」(矢野暢、33)とさえ言うのである。しかし、反面、「ただ、この本を貫くある種のヒューメインな精神性は高く買えとおもう」(矢野暢、33)といい、「娘子軍(じょしぐん)のことに ついて触れる場合、まず一つの大事な手続として、昭和35年に世に出た(活字化の意味、資料そのものは戦時中より知られていた)『村岡伊平次自伝』という資料をどう評価するかという問題である。なにせ、南洋の娘子軍に脚光をもたらした最大の功労者は村岡伊平次その人であり、そしてかれの残したこの自伝を通過することは日本人の南方進出を学ぶものにとっての一里塚であるからである」(矢野暢、30)ともいうのである。資料という視点からみても疑問が多いと言いつつ、にもかかわらず、『自伝』はこの問題を知る上で不可欠の資料であるというのである。「私の正直な気持ちをいえば、この本の文章の一行たりとも、過去の事実の検証のために用いる気にはなれない」(矢野暢、33)という矢野も、「ただ、この本を貫くある種のヒューメインな精神性は高く買えとおもう」(矢野暢、33)とか、「なにせ、南洋の娘子軍に脚光をもたらした最大の功労者は村岡伊平次その人であり、そしてかれの残したこの自伝を通過することは日本人の南方進出を学ぶものにとっての一里塚であるからである」(矢野暢、30)とか言い、「この本に描かれてある娘子軍の生態や彼女らが食べ物にされるメカニズムは、まぎれもなく歴史の実像である。・・・村岡の自伝には、そういうメカニズムの内部に身を置きメカニズムを動かす立場に居た者でなければ描けない、事実をおさえている者だけが持つ迫力がある。この本の登場人物には、歴史に実在した人間がそのままの役割を受けてあらわれている。そして、なお大事なことは、村岡伊平次がなにげなく語る分別づいた述懐部分がさえているのである。・・・このような意味で、この本は、日本人の歴史を語

るやはりかけがいのないドキュメンタリーなのである」(矢野暢、31)とも記述するのである。あらためて、『自伝』を見よう。

『自伝』は多くのことを語っているが、目立つのは、そして注目したいのは、村岡が自らを、ある種の英雄として正当化していることである。彼は、人が何と言おうと自分は彼女たち醜業婦にとって救済者なのだということである。困り抜いた彼女たちに救済の手を差し伸べてきたのだという主張が随所に展開されている。かれは女衞として批判・避難の対象となるところに反論を用意することを忘れていない。確かに彼の主張を全て除けることは難しい。社会学者マートンは、「<特権をうばわれた階級>は、合法的な社会構造のもとでは十分に満足されない欲望をもつ一つの下位集団であって、政治的ボス組織がこの欲望を満足させている」(Merton, R.K. = 森東吾他訳、68)と述べている。偽善的な村岡の行為に、そして一部は真実であったと思われる村岡の行為に、有難さや一種の「恩」を感じた醜業婦がいたとしても不思議なことではない。村岡の正当化は、哀れな醜業婦に対する個人的な支援(世話や救済)として主張されるだけではない。それは、国家に対する忠誠と貢献を行った人間として、誇らしく主張されるのである。村岡の自負は相当なものである。醜業婦だけではない。自分は、浮浪学生の救済や前科者の更生をはかることで立派に国のために貢献してきたのだという意識が彼の中にある。日本人会を組織して同胞の融和と外地における団結を図り、延いては国家非常事態に対する奉仕を行ったと彼は自認するのである。女衞としての自己を正当化し、それを、国家のためだと主張する態度は常人にはなし得ないところであるがそれを村岡は平然となしている。「そこで拙者考えたのは、前科者は国家の為にならん。これに大金を持たせて事業者になし一銭でも多く国家の負担をおわせ

て国につくさせる。だれでも大金あれば真人間になる。泥棒もやめる。悪も善に立ち返るのである。このためには<前科者収容所>が必要でしょう。そこで拙者は彼らを犠牲者に使い、南洋各地を開発させ、国家百年の大計を築こうと考えたのであります」(村岡・今村、87)。「南洋の今日の開発齟をお考えくださりたい。前科者、有罪者が基礎を固めたことはおわかりになろう。・・・今日ではいたる地で商品を取扱っておる商店の70%以上は前科者、密航者ではありませんか。大会社、大商店の源をお考えください。彼らをピンブ(女郎部屋主人)だ、誘拐者だとそしるは愚の骨頂なり」(村岡・今村、209)。これは村岡の自己弁護であると同時に、現地の事情に通じていない、いわゆる知識人の類に対する痛烈な批判である。南洋においてはわれらこそがお国を支えてきたと言わんばかりの主張はそれだけではない。「明治37年3月には、献納金を募集することになり、拙者はマニラ中を奔走して、合計5千46ドルを集めた。その名簿を写すと、次の通りである。以上のごとく、国家非常時に際しては、いかに貞操を売る女郎といえども、国家をわすれる国民にあらず、いずれも国のためなら、金銭も惜しまず団結する心は、まことに感心な国民である」(村岡・今村、236)と醜業婦をほめあげる。もちろん、それが、醜業婦を介在させた女衞村岡自身への賞賛であることは明らかである。

そのような言い方が許されるとすれば、村岡の主張は、信憑性に欠けるものの、幾分かの実態を含んでいる。それ以上に大事なことは、村岡が、近代日本の本質を見抜いていたことである。人民は天皇制国家に奉仕することをもって自己の存在意義を確認できたという近代日本の国家思想を村岡は知っていた。もちろん、それによって村岡たち女衞の行為が正当化されるわけではない。しかし、娘子軍だけでなく、内地においても人権の確

立されていなかった近代日本においては、村岡のような形で国家への奉仕を考えた人間も少なくない。社会的弱者に寄生する女衞にこうした正当化を許した構造が近代日本には存在したのである。むしろ国家は、女衞・ピンブと蔑む人間を利用し、利用し尽くした後で、それを国家の名において不当な存在として切り捨てた。この場合、切り捨てたものと切り捨てられたもののどちらが人間的かといえまじが無く切り捨てられた方である。村岡は自己弁明のために醜業婦を巧みに持ち上げた。そして究極的には、国家の末端で国家と自己を一体化させ、醜業婦を最後まで食物にした。しかし、ことはそういう指摘で終わらない。それはなぜか。繰り返すならば、醜業婦と女衞・ピンブは偶然に誕生したのではないからである。女衞を正当化する必要は全くない。否、それは正当化されるようなものでは決してない。しかし、祖国を離れ厳しい生活を送る者たちにとって、たとえそれが自分たちを欺き、都合次第で自分たちを切り捨てるような国家であったとしても、国家は心のよりどころであった。「23日ぶりにヨシは陸地をふんだ。そこはさまざまな人種が群れていて、異様な熱気があった。・・・かっとならぶような光りの中を中国人もヨーロッパ人も歩いていた・・・ヨシはこのさまざまな人種の群れに興奮した。天草では意識しなかった<日の丸>がヨシの心身をなまめかした」(森崎和江、189～190)。ヨシは「ジャパニーズ・マッサージをはじめたいと考えた。・・・ヨシはやといいれた3人の日本の女に、まずつぎのように話した。ジャパニーズ・マッサージは客商売じゃなかと。日の丸は胸に治めた民間外交じゃいけん」(森崎和江、190:再出)。はたして南洋に行った皆がヨシと同じ心境にあったかどうかは分からない。しかし、少なからぬ人にヨシと同じ感情があったにちがいない。それが近代日本を生き抜いた民衆の姿であり、近代日本はそうし

た民衆を使い捨てきた。

醜業婦や女衞は国家が貧困を背景に排出された醜業婦の存在を公然と認め、それにたいする必要な措置、保護や救済をなさなかったことの結果として存在したのであって、そこには、マートン(R.K.Merton)が、ボシズムの機能として指摘したところに通ずる現実がある。敢えて、ここでは、「いずれにせよ、困っている人々に援助をあたるという点で名目上同一の機能を果たしているこの二つの選択的構造の競争では、明らかに、インパースナルな、社会的距離のある、法律に拘泥する職業的な福祉事業家よりも、ボス支配の政治屋の方が、その奉仕する集団とよく結びついている」(Merton, R.K. = 森東吾他訳、68)という指摘を記憶に留めよう。マートンの指摘は、女衞に関する一面的理解を超えて、かれらが社会的にはたしてきた役割＝機能の客観的な理解が必要であることを教えている。

註

註 1 もちろん、海外醜業婦を天草女に限定する必要はないし、海外醜業婦の問題は天草を超えて見られた事態である。そのことを念頭におきながら、以下、天草を中心に、海外醜業婦に関する記述を行うことにしよう。

註 2 天草における上田家の話は有名で司馬遼太郎の街道をゆく17『島原・天草の諸道』(朝日文庫、1987年)にも記述がある。「真田幸村の家臣に、滋野(根津とも言った)正信・定正父子がいた。これが上田家の祖である。滋野正信・定正は、大阪落城の少し前……堺から船に乗って西国をめざし、やがて日本国の西のはしの天草諸島のさらにはしである下島の高浜に住み家来たちとともに炭焼きをして暮らした。姓を上田に変えたのは、故郷の信州上田を偲んでのことであったという。……伝五右衛門の一代は、この貧村の窮民をい

かに食わせるかという課題で終始した。……この高浜村付近の山は、昔から砥石を産した。これを砕いて磁器を焼けばよいのではないか、というのが伝五右衛門の着想であり、私財を投じて研究し、事業化した」(267～268)。

註 3 『からゆきさん』は1976年、朝日新聞社より刊行された。19世紀後半にアジアに渡り娼婦として働いていた日本人女性「からゆきさん」(その多くは、長崎・熊本など九州で出身の貧しい家庭の娘たち)について、森崎は綿密に聴き取りをし、当時の新聞記事をはじめ膨大な資料にあたるなど、丹念な調査を重ねた。『からゆきさん』は何度にもわたる推敲を経て書上げられたノンフィクションの力作である(からゆきさん、191～192)。

註 4 山崎は、「これまでのからゆきさん研究は、接客人数や成功回数について教えてくれるところが少なく、しやがってわたしは、彼女たちが一夜に平均何人の客を相手にしたのかを精確には知らなかった。……わたしには、文献をとおして知り得る多くのからゆきさんの悲惨な生涯も重たかったが、しかしそれ以上に、いま、ひとつの家に一緒に暮らしているおサキさんの生涯が、限りなく重たかった。……この、おサキさんの小柄で骨ばったからだを抱きしめて、泣き尽くしたい思いと、その思いを押えなければならない苦しさを、わたしはどこで晴らしたらよいのであろうか。答えはおのずから明らかであって、私からゆきさんの声をつかむために天草へきて彼女の家に住み込んだのである以上、それは、彼女の生涯の^{ひだ}襞々を可能な限り克明にすることのほかにはない。そして、彼女みずから語るその半生を曲がりなりにも聞き終えた今となっては、彼女と直接にかかわった人々の証言を得ることが、彼女のからゆきさんとしての生活をより深く知ることにはかならずぬであろう」(山崎朋子、154～156)という。こ

の調査・研究を知る上でやはり重要な部分であろう。

註 5 歴史学者 森の認識に重ねて、ここでは、山崎の指摘を記憶にとどめることにしよう。「からゆきさんにかぎらず売春婦についての研究というと、多くの場合、その悲惨な境遇の報告とそれにたいする研究者の同情のみが強調されて、彼女たちの<人間的価値>については全く切り捨てられていたと言える。もちろん、売春婦研究の目的は、つまるところ売春の社会的根絶にあるのであって、彼女らの人格的評価にあるわけでないから、なかば必然的に売春生活の悲惨なありさまの報告とそれへの同情に傾くのであろう。けれども、からゆきさんをはじめ多種多様な売春婦たちのなかには、肉体を売っていきなければならないという同一の条件のもとで、絶望して自堕落になって行く人がある一方、どん底の汚濁を見極めたまさにそのことに学んで人格的に円熟し、思想的に・哲学的深みまでに達する人もあるのだ。そしてそのことは、従来の売春婦研究から洩れていることであればあるほど、みずからの春を霧がずしては生活できなかった底辺女性の名譽のために、わたしはここに明記しておかなければならないと信ずるのである」(山崎朋子、255～256)。これまでの売春婦研究が多くの場合、その悲惨な境遇の報告とそれにたいする研究者の同情のみが強調されて、彼女たちの<人間的価値>については全く切り捨てられていたという指摘は検証に価する。山崎の言うように、確かに、研究の目的は同情にない。売春婦研究の目的は、つまるところ売春の社会的根絶にあるのである。

註 6 この記述は、先の、「しからは海外出稼ぎのいわゆる天草女たちの大部分が誘拐された女たちだったのか。内地の遊郭に身を沈める女たちの場合を、大正7年(1918)の調査によって見ると、有教育者割8分、無教育者2割6分・その家庭の家長の

職業も多種多様で、天草女の場合のように、農業が絶対多数を占めてはいない。また遊郭に身を沈める女たちの大部分が、身を沈める以前にすでに節操を捨てたものたちであるのに対し、天草女たちは、誘拐されるまでは無学、世間知らずの田舎の生娘であった」という森の指摘に符合する(森克己、第6章、97～99)。海外醜業婦となった天草女がどれほど誘拐された者であったかの判断は難しい。しかし、おそらく、その割合を正確に知ることは不可能であろう。

註 7 清水洋・平川近均もからゆきさんの経済効果についてふれ、まず、表1-11が示すように、1903年におけるシンガポールにおける在留日本人948名のうち、売春に直接かかわっていたのは666名の娼妓と楼主で、全体の7割を占めていた。残りは、雑貨商、呉服屋、医者、洗濯屋、鼈甲細工店などで、これらの業種も当初は娼妓を主要な顧客としたと書いている(『からゆきさんと経済進出—世界経済のなかのシンガポール—日本関係史—』(コモンズ、1998年)。

註 8 天草流れという言葉は天草の人々に対する蔑視である。水俣では水俣に移住した漁民にこの言葉が使われた。水俣病の患者にも使われた。一見すると、それは、水俣人による天草人の差別を示すものであるが、根源を辿れば、天草の内部に、職業や階層を中心にした差別の構造が根強く存在した。経済的な貧困が社会的排除を生み社会的排除が差別と偏見を生んだという風土の研究は天草が現代に贈る教訓であろう。

註 9 娼妓に対する偏見と差別は当初から民衆の中にあつたわけではない。それは民衆を選別し、支配と秩序の源泉にしようとする権力によって創られたものである。彼(谷川)の娼妓(性)に対する肯定は、本来、女性の持つ自由で開放的な娼妓性を卑しめる権力の存在を指摘するところにある。「私が娼妓に関心を抱くのは、それが男女の性愛

の表現の一形式であり、しかも娼婦の様式と深いつながりを持つと信ずるからだ。それから、歴史的に派生したのが娼婦であり、しかもその経過を注意深くたどるということはいままでかならずしもおこなわれなかった。(非日常的世界との交錯—解説・娼婦の世界—(谷川健一編「娼婦」(近代民衆の記録3、人物往来社昭和46年、11)・・・尾類(ズリ)とは沖縄で娼婦の呼称であった。柳田はそれが女郎からの派生語であるという通説を退けて、九州方言で「出る」を意味する「ズル」などと共通の根をもっていると主張する。たとえば奄美大島で売女をズレまたはドレと呼ぶのともつながりがある。大島には「廻りズレ」(廻りドレ)と「居ズレ」(居りドレ)の二種類のズレ(ドレ)がいた。前者は村むらを渡りあるく者で、有効女婦(うかれめ)に相当する。後者は生まれた土地に住みついておなじように自由な恋愛をしているもの、つまり土娼の類であった(谷川健一、11～12)・・・廻りズレと居ズレを区別するものは日常と非日常とのちがいである。奄美大島では昔は、少年が一人前の男となるばあいの儀式に女の添隊というものがあつた、ソレニハズレ(ドレ)があつたという。これは日本本土の村むらでもゴケの役割とされるところが少なくなかつた。これ

は居ズレに相当する(谷川健一、12)・・・このズレの流行はとくに江戸末、明治期にみられたというが、その理由として家人<やんちゅう>(黒糖奴隷。他家に隷属する農奴のことを奄美ではそう呼ぶ)が氾濫し、それと見合うように社会機構からはみ出して、いわゆるアマレオナグ(余り女)が数をまし、ズレ階級もそれと合流し、江戸の中期以降は歌舞よりは売春を主とするようになったという金久正の指摘は、冒頭にかかげた柳田国男の所説と一致している(谷川健一、13)・・・日常的秩序の中の性愛の自由とは、もともと次元を異にして併存していた。たとえば客神のすがたをした旅人が、土地の『女にもてなされるといように、外来者との性愛が許容される一方では、隣接する太部落との通婚と性愛はきびしく警戒されていた。男女の性愛は、部落共同体の中において解決するものとするのが、その日常的の秩序をまもるうえでの通念であつた。そのために部落の娘と他部落の若者の『相愛は厳罰に処すべきものであつた。そのかわり部落の中の性愛行為は寛大であつた。たとえば、沖縄では戦前までは「毛遊び」<もーあしゅ>がさかんであつた。部落の若い男女が野原や海岸で、夜ごとに歌つたりさわいだりしてあそぶ習慣があつた。それは男女の集団が性

表1-11 シンガポールにおける職業別・男女別在留日本人数(1903年6月末現在)

職業	戸数	男	女	合計	職業	戸数	男	女	合計
娼妓	0	0	585	585	理髪業	1	5	3	8
楼主	99	1	80	81	官吏	1	6	0	6
雑貨商	12	43	19	62	貿易商	1	6	0	6
コーヒー店	14	14	26	40	大工	1	1	4	6
洗濯屋	5	19	4	23	射的業	3	1	4	5
旅人宿	6	10	8	18	牧畜業	1	3	1	4
医者	3	10	7	18	鼈甲細工店	1	2	1	3
飲食店	4	10	7	17	仕立物職	1	0	2	2
僧侶	1	7	3	10	無職	18	32	12	44
呉服屋	1	5	3	8	合計	176	179	796	948

愛のはけ口を見出し、または結婚のあいてをえらぶ機会としたのであった。しかし日本本土から派遣された役人はそれを淫風とみなして、禁止した。男女の性愛の自由選択の場である「毛遊び」が禁止されたあと、部落の女に自由は無くなり、男ははけ口をみつけて遊郭にかようようになる。かえって風紀は紊乱くびらん>するようになった、と井波普猷くふゆう>は嘆いている。つまり部落共同体の日常的秩序に組みこまれていた性愛の自由を締め出したことが、娼婦と遊郭を繋昌させたというのである（谷川健一、17～18）。・・・伊藤普猷のこうした嘆きは、まえにのべた柳田国男の所説と一致する。しかし共同体の秩序のなかで「不用な女性」と性愛の相手を見つけるのに「不自由な男性」が性愛の場を部落の外に見出すということが、たんに社会的な原因によるものであるか、もしくはそうでなく、姓の「本質」に属するものであるか、ということになれば私には一口に前者に限定しがたいものを感じる。率直に言えば、「特定の男性に従属しないこと」、「非日常的世界の存在」の二つは、「特定の男性に従属すること」、「日常世界の秩序に属する」ということと、もともとから平行して別の流れにあったと考えるのだ（谷川健一、18）。ここで、特定の男性に従属しないこと、非日常的存在であること、この二つの本質をまとめて、日常的秩序の羈絆からの自由を意味すると考えることができる。もとより日常的な羈絆のなかに女の自由がない、というのではない。それとは別種の自由もあることを、私は強調したいのだ。すなわち無名の愛の非日常的結合のなかに自由を見出そうとする男女の見果てぬ夢が、女のなかの娼婦性の本質を形成する（谷川健一、22）。

引用文献

- 網野善彦『中世の非人と遊女』中央公論社、2005年
 石橋湛山、松尾編『石橋湛山評論集』岩波書店1984年
 石牟礼道子編『水俣闘争わが死民』現代評論社、1972年
 今村昌平企画『村岡伊平次自伝』講談社、1987
 入江寅次『邦人海外発展史』原書房、1981年
 円地文子『南の肌』集英社、1978年
 大場昇『からゆきさんオキクの生涯』明石書店、2001年
 岡本達明「自由の蒼民一解説・漁民の世界一」（岡本達明編『近代民衆の記録—7 漁民』（新人物往来社、1978年
 北野典夫『天草海外発展史』（上下）葦書房、1985年
 倉橋正直『北のからゆきさん』共栄書房、1989年
 倉橋正道『島原のからゆきさん』共栄書房、1993年
 清水洋・平川近均『からゆきさんと経済進出一世界経済のなかのシンガポール・日本関係史一』コモンズ、1998年
 高木繁幸『島原藩の経済』ゆり書房、2006年
 谷川健一「非日常的世界との交錯一解説・娼婦の世界一」（谷川健一編「娼婦」（近代民衆の記録3、人物往来社、1971年
 宮本常一（1）、『日本残酷物語』第1部「貧しき人々のむれ」、平凡社、1959年
 宮本常一（2）「出稼ぎの島」、『日本残酷物語』現代編1、「引き裂かれた時代」平凡社、1960年
 宮崎康平『からゆきさん物語』不知火書房、2008年
 森克己『人身売買』、至文堂、1959年
 森崎和江・中島岳志『日本断層論—社会の矛盾を生きたるために—』NHK出版、2011年
 森崎和江『からゆきさん』朝日新聞社、1976年
 矢野暢『南進の系譜—日本の南洋史観一』千倉書房、2009年
 山崎朋子『サンダカン八番館—底辺女性史序説』筑摩書房、1972年
 別冊歴史読本「歴史の中の遊女・被差別民」、新人物往

来社、2006年8月

Frazer, J.G./*Psyche's Task — A Discourse Concerning the Influence of Superstition on Growth of Institutions*, 1920, 永橋卓介訳『サイキス・タスク』岩波書店
1939年

Merton, R.K., *Social Theory and Social Structure*, *The Free Press*, 1957 (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳、社会理論と社会構造、みすず書房、1961年)

付記

本論は、われわれが既に発表した、二つの論文「明日の福祉国家と環境問題—近代日本と水俣の教訓—」(社会福祉第51号)、「近代日本と周縁—浦河<天草>移民団の歴史と現在—」(社会福祉第52号)に続く、天草研究である。われわれの天草研究は本論を以って終了する。本論は、問題の所在—日本の社会と醜業婦、と3.天草の経済社会と海外醜業婦を内藤が、1.森勝巳『人身売買』、2.森崎和江『からゆきさん』・山崎朋子『サンダカン八番館』、4.結語に代えて—海外醜業婦と日本社会の病理性—を内藤と佐久間が、各一部分をそれぞれ執筆し、相互に書き上げた原稿に修正加筆を施した。その上で内藤が文体の統一を行った。文責は内藤にある。

